2024年度大学図書館職員短期研修

大学図書館職員のスキルアップ法

大阪公立大学

中村　健
t-nakamura@omu.ac.jp

2024年10月24日（木）11：00-12：15（75分）

0.本日の進め方と自己紹介

AL:中村, 健(1974-)||ナカムラ,タケシ

職歴

1997.4　民間企業（専門紙）に就職

2001.4　大阪市立大学に就職

担当	従事期間（延べ年）	主な成果
雑誌・電子リソース管理	10年	EJの全学共通経費化創設と見直し
図書館システム	4年	システムリプレイス
機関リポジトリ	4年	機関リポジトリの立ち上げ
サービス	4年	情報リテラシー教育（初年次～院生）

2019.4　<u>雑誌・図書システム・リポジトリ・整理担当係長</u>

2022.4　<u>大阪公立大学（開学）の雑誌・システム担当係長</u>

新大学ジャーナル/図書館システムの統合

2024.4　<u>雑誌・機関リポジトリ担当　課長代理</u>

OA加速化事業、R&P契約、機関リポジトリ統合、ERMS稼働

0.本日の進め方と自己紹介

経験のない業務

・図書受入業務

・目録（図書）＝目録（雑誌）は経験あり

・ILL　　＝ 海外図書館への依頼はあり

・医学部図書館など学部/部局図書館勤務

最初から経験したい業務

・目録（図書）

・ILL

・メタデータ作成（JPCOAR）

本日の内容（75分）

0.本日の進め方と自己紹介　5分
1.スキルアップ法：短期研修振り返り　15分
2.図書館員のスキルとは　5分
3.スキルアップ法：業務のポイント　15分
　事例研究：ある管理・システム系職員のあゆみ
4.スキルアップ法：温故知新　10分
5.スキルアップ法：他業界との比較　10分
6.質疑応答　15分
7.まとめ　瞬時

1.スキルアップ法：短期研修振り返り

井上昌彦氏（2014～2017）・森いづみ氏（2018～2021）がともにあげていたこと

・職場での研修（OJT)
・自学自習：文献、WEB
・研修・イベントへの参加→学外の研修
・委員会やタスクフォースへの参加
・学外活動:執筆・講演

参照）参考資料1

1.スキルアップ法：短期研修振り返り

学外活動のスキルアップポイント

・通常の業務では得られない情報/スキル/人脈を得られる。＝「今」より「明日」に役立つスキル

・通常業務に支障をきたさない＝所属の「理解/応援」

・自らの活動を「可視化」＝所属への還元

業務の分野	内容	役割	スキルアップ
目録	目録講習会	講師/運営	プレゼンカ 企画立案力 調整力 人脈 情報
機関リポジトリ	DRF、XooNIPS	講師/委員	
電子リソース	JUSTICE	委員/講師/司会	
電子リソース/システム/情報リテラシー	ベンダー・出版社のイベント	講師	プレゼンカ 広報

1.スキルアップ法：短期研修振り返り

まずは…

・自分の担当業務をがんばろう
・その業務が関わる事例を多く知ろう
・多種多様な仕事に取り組もう（学内/学外）
・多くの人を知ろう（学内/学外）
・コラボ、他流試合をしよう（学内/学外）

↓

習って覚えて真似して捨てる（真藤　恒）

2.図書館員のスキルとは

2010年と2023年を比較する

2010

大学図書館の整備について（審議のまとめ）－変革する大学にあって求められる大学図書館像－　概要　2010年

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/attach/1306126.htm

（2）大学図書館職員に求められる資質・能力等

1.大学図書館職員としての専門性

大学図書館職員には、図書館に関する専門性に加えて教育研究支援を円滑に行い得る学生や教員との接点としての機能を含めて大学全体のマネジメントができる能力などが求められる。特に最近の状況変化に適切に対応するため、学術情報流通の仕組みに詳しく、学術情報基盤の構築ができる人材の確保が重要。

2.学習支援における専門性

大学図書館職員には、各大学等において行われる教育研究の専門分野に関する知識も求められる。

3.教育への関与における専門性

大学図書館職員が、情報リテラシー教育に直接関わることは新しい方向性であり、教員との協力の下に適切なプログラムの開発を行うことが課題。また、教員や学生とコミュニケーションを図りながら、教育課程の企画・実施に関わることも必要。

4.研究支援における専門性

研究者が文献に容易にアクセスできるように必要な情報資源を関連付けたナビゲーション機能及びディスカバリー機能を強化することが必要。また、機関リポジトリの構築や新たなサービスの開発など従来の専門性をさらに発展させることが期待される。

2.図書館員のスキルとは

2010年と2023年を比較する

2023 オープンサイエンス時代における大学図書館の在り方について（審議のまとめ）

(3)上記機能やサービスの実現に求められる人材について

・「デジタル・ライブラリー」を実現する上で大学図書館職員に求められる知識やスキルについて整理・検討する。それに応じ、大学図書館職員の専門資格として新たな認定制度の構築や、既存の履修プログラムの活用等を進め、専門職としての能力開発の促進、新たなキャリアパスの形成など、構造的な課題を解消する組織体制や制度を構築する。

・ そのなかでも、大学図書館職員は、これまでの業務に加え、研究データの管理にも携わることになるため、大学における学問の在り方や研究のライフサイクルを理解することが不可欠であり、その中で自らが行う支援がどのような機能として位置付けられるかを認識し、適切に行っていく必要がある。

・今後の大学図書館の役割を明確にし、それに基づく業務の再構築の考え方を踏まえ、各大学は、大学全体における人的資源配分の見直しや教育・研究推進体制の構築等と連動する形で、大学図書館に専門人材を配置できるよう組織体制と人的資源配分を見直す。

「オープンサイエンス時代における大学図書館の在り方について（審議のまとめ）【概要】」より
「オープンサイエンス時代における大学図書館の在り方について（審議のまとめ）」科学技術・学術審議会情報委員会オープンサイエンス時代における大学図書館の在り方検討部会、2023.1.25
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu29/004/mext_00001.html

2.図書館員のスキルとは

スキルアップ法：既存業務の再構築とパートナーとしての能動的な存在感

	2010	**2023**	**変化**
1	学術情報流通の仕組みに詳しく、学術情報基盤の構築ができる	・デジタル・ライブラリーを実現する。 ・実現に向けて定義の再構築	より能動的に、学術情報の生産，普及，利用を促進する活動を展開する。 支援組織からパートナーへ。
2	・情報リテラシー教育に直接関わることは新しい方向性 ・教員や学生とコミュニケーションを図りながら、教育課程の企画・実施に関わる	・学修環境整備業務については再構築 ・これまでの業務+研究データの管理→研究活動を知る→支援活動をデザイン	

3.スキルアップ法：業務のポイント

事例研究：ある管理・システム系職員のあゆみ

非「サービス」系図書館員＝サービスを支える仕事
電子リソース・雑誌管理業務＝学術情報の購入と運用
図書館システム業務＝業務システムの安定運用

	システム・管理系	**サービス系**
相違点 （年度末の意味）	年度末：年度を終わらせる作業期間 夏休み：EJ外雑発注で多忙 リプレイス：前半	年度末：新年度のための準備期間 夏休み：棚卸し リプレイス：後半
相違点 （成果の数値化）	エラー件数0 契約価格　○○○○円安い 数値が小さいほうがよい	入館者数　○○人突破 貸出冊数　○○冊 数値が大きいほうがよい
業務の対象	ベンダー＞教員＞職員	学生＞教員＞職員

3.スキルアップ法：業務のポイント

事例研究：ある管理・システム系職員のあゆみ

<u>雑誌・電子ジャーナル管理</u>

係員～今まで：約15年　　これが専門性？

・主な仕事

全学共通経費による電子ジャーナル購入の方針策定（4回）

ERMSなどを使った電子リソース管理へ挑戦

リンクリゾルバの導入（2回）

・苦労した点

予算獲得：早めの行動/事務ルール/ロジック

新システム：現場に落とし込む

3.スキルアップ法：業務のポイント

事例研究：ある管理・システム系職員のあゆみ

<u>スキルアップ！</u>

・所属の事務ルールを覚える
決裁／契約規程／予算／会計規定／システム
調整方法（5W1Hを知る）

・「世間」の考え方を意識する
契約に関する新聞記事をよく知ること
（消費税、契約に関するトラブル、外部資金、東京五輪）

3.スキルアップ法：業務のポイント

事例研究：ある管理・システム系職員のあゆみ

<u>図書館システム・機関リポジトリ</u>

係員：数年　係長　数年

・主な仕事

システムリプレイス主担当（係員1回、係長2回）

機関リポジトリの立ち上げ

自分でDBを作成（例：電子ブック検索）

・苦労した点

システムの新機能を導入する場合は、「見える化」を意識しよう。新しい仕事を該当部門の通常業務に落とし込むために知恵を振り絞ろう

3.スキルアップ法：業務のポイント

事例研究：ある管理・システム系職員のあゆみ

図書館システム・機関リポジトリ

大学統合におけるシステム統合の経験から

システム　or 業務のやりやすさ どちらを優先。

システム優先＝ある意味予算と関係している。

大学図書館業界はローカルルールが多い業界

標準化しやすい部分となじまない部分

システムは業務をサポートするもの。システムに業務が振り回されないようにシステム設計を行うこと。

3.スキルアップ法：業務のポイント

事例研究：ある管理・システム系職員のあゆみ

図書館~~システム~~・機関リポジトリ+目録

・当初の見通し（新たな目録業務）と違った点
著作権管理や学位論文など「研究」と地続きの業務が多い
機械化された作業（ハーベスト）が多い

↕

目録における件名、分類のように、メタデータにカタロガーが独自に判断するフィールドが少ない

3.スキルアップ法：業務のポイント

事例研究：ある管理・システム系職員のあゆみ

〇目録業務とメタデータ関連業務

異なる身体感覚　→

目録をとる（能動的に記述）

手作業、請求記号、件名付与における判断、

メタデータを入力する

システマティックかつ大量に登録

〇ILLとAPC管理

論文レベル・予算管理

似ているからというだけで業務を集中化させても
身体感覚が異なる業務を混在させるとかえって非効率

3.スキルアップ法：業務のポイント

事例研究：ある管理・システム系職員のあゆみ

<u>図書館サービスと管理・システムスキルの交差点</u>

- 情報リテラシー教育

　このキーワードで検索するとなぜこの検索結果になるのか？

　検索の仕組みとメタデータから説明可能

　自分の論文を効果的に流通させる方法とは

　学術論文のSEO対策

管理・システム系で培ったスキルをどのように
図書館サービスで生かせばよいのかを知った

3.スキルアップ法：業務のポイント

事例研究：ある管理・システム系職員のあゆみ

運がよかったこと

・紙から電子ジャーナルへの移行を体験
　業務を通して基本的な仕組みが理解できた

・目録からメタデータへの変化を理解

・ディスカバリサービス・リンクリゾルバなど
　積極的に情報をとれば、新しい潮流に乗れた

★導入することが評価された時代
→どのように業務に落とし込むか、運用の成果を評価する時代へ

・NII主催の各種講習会でスキルアップができた
　業務（出張扱い）の中で他流試合が行えた

3.スキルアップ法：業務のポイント

事例研究：ある管理・システム系職員のあゆみ

チャレンジの結果

担当	スキルアップ内容	結果	詳細
雑誌管理	簿記	◎	2級まで取得（２０代）
電子ジャーナル管理	英語・英会話	×	英語力をUPするまで至らず Google翻訳にお世話になる日々
システム	プログラミング	×	挫折
システム	HP作成	○	業務上最小限の知識を覚えたが、自ら深めるところまで至らず
機関リポジトリ	DB作成	○	電子ブック・貴重書など自らDBを作成した。
目録	目録	○	問題集に取り組む
（サービス）	情報管理（検定）	×	受験せず

3.スキルアップ法：業務のポイント

事例研究：ある管理・システム系職員のあゆみ

<u>研究支援として役立つ図書館員のスキル</u>

◆発信/検索のサポート

・何を、いつ、どこに掲載すべきか？

J-STAGE/機関リポジトリ/CiNii Books

・学会のWEB公開に必要な書誌事項

SEO対策（英文、キーワードの選定）

オープンアクセス

◆文献検索のサポート

訪問利用/所蔵調査

◆資(史)料受入

図書館機能に対する絶大な信頼

伝統的な図書館スキルによる
コーディネート

3.スキルアップ法：業務のポイント

事例研究：ある管理・システム系職員のあゆみ

図書館業務が研究支援にシフトする流れは確実どのようなスキルが役立つかを見極めたい！！

研究活動に身を置いて研究支援を考えてみた

実践した研究プロセス

プロセス	内容	関連度	図書館業務との関連
研究発表/投稿/出版	研究ノート（査読あり）2本 学会発表　など	◎	学術情報流通 情報リテラシー レファレンス
研究大会運営	司会・企画		
学会運営	理事・委員		
外部資金PG	サンデー毎日 講談本（吉沢コレクション）	○	レファレンス
資（史）料受入		◎	デジタルアーカイブ 資料保存

4.スキルアップ法：温故知新

	事項	最近の状況
1980年代	二次情報検索データベースの時代（オンライン・CD-ROMを使った検索）	Google Scholar
1985年	NACSIS-CAT提供開始	CAT2020　/　CAT2022 CAT202?：NCR2018適用
2000年頃	電子ジャーナル導入（SD21など）	OA2020 Read&Pubilishing契約
2005年	CiNii Articlesサービス開始	2022年 CiNii Research
2005年頃	機関リポジトリで紀要・論文公開へ(1990年後半の電子図書館とは異なるフェーズ)	研究データ管理と機関リポジトリ
2010年頃	何度か目の電子書籍元年	コロナ禍で図書館への電子ブック導入は加速へ

現在は各サービスの転換点にあたるのではないだろうか？

4.スキルアップ法：温故知新

この変化にどのように取り組むべきか？

スキルアップするためのポイント

- サービス開始から20年、サービス再編成の時期である。

対象：NACSIS-CAT・ CiNii・EJ契約

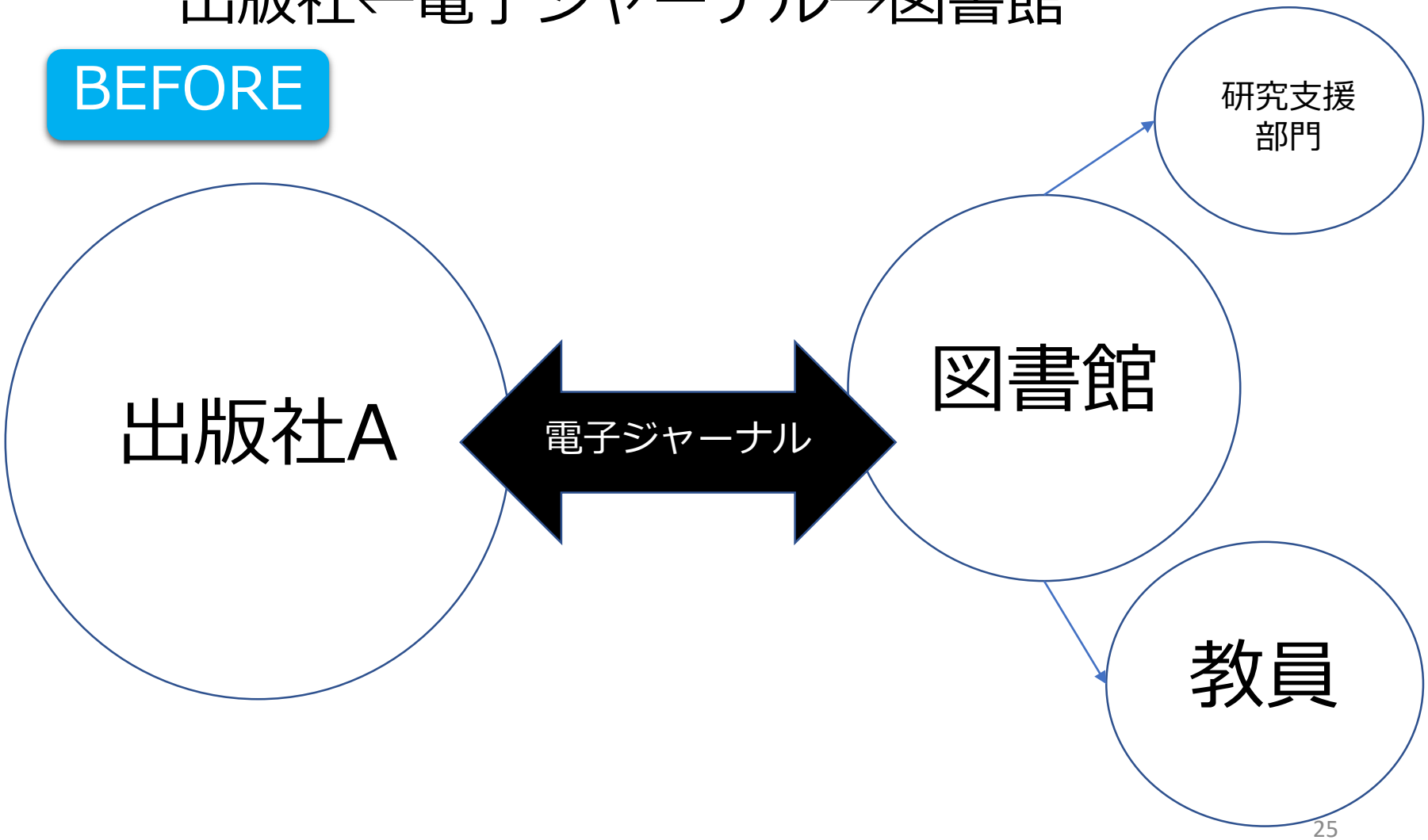
- 歴史は繰り返すが同じ形・現象にはならない

例：目録：図書館は分散（各館対応）から集約（NII）また分散（コミュニティ）へ

4.スキルアップ法：温故知新

出版社←電子ジャーナル→図書館

BEFORE



4.スキルアップ法：温故知新

エルゼビア社のM&A

77

船守美穂「学術論文発表と研究評価を取り巻く環境の大変貌ーオープンアクセス誌がもたらすパラダイムシフト」
『セミナー「学術論文発表を取り巻く最新動向：オープンアクセスの現在」講演資料（令和2年1月24日（金）開催）

4.スキルアップ法：温故知新

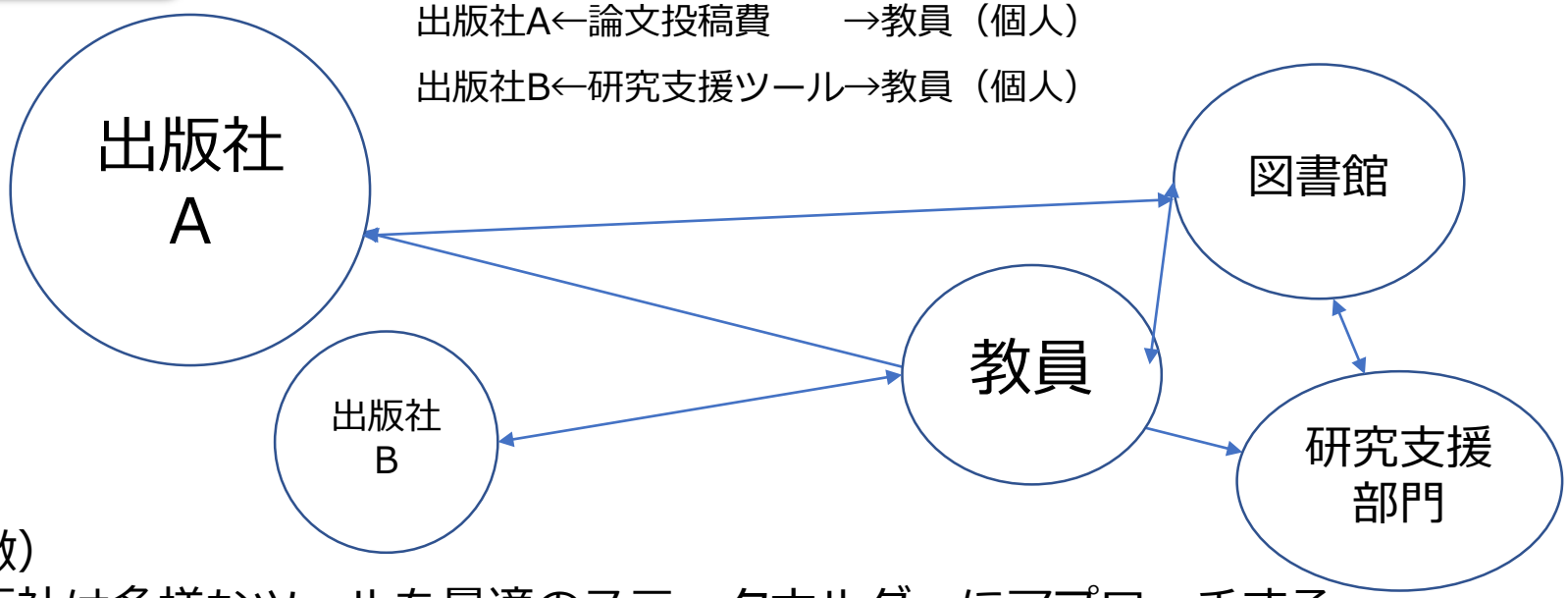
After

出版社A←電子ジャーナル→図書館

出版社A←研究支援ツール→研究支援部門

出版社A←論文投稿費　　→教員（個人）

出版社B←研究支援ツール→教員（個人）



（特徴）

・出版社は多様なツールを最適のステークホルダーにアプローチする

・図書館（中間組織）ではなく個人への提供

・図書館員は研究支援を専門とした職員群の1領域

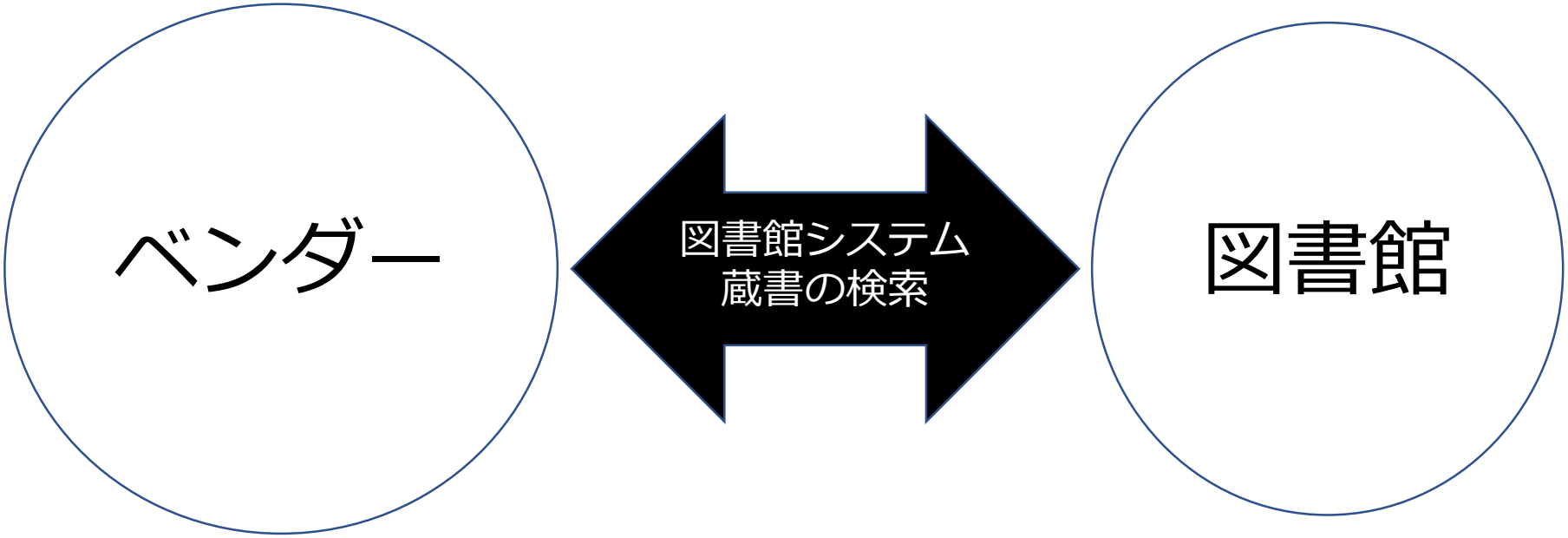
→どのポジションでも活動できるスキル

　図書館の立場を踏まえた協同作業ができるスキル

4.スキルアップ法：温故知新

ベンダー←図書館システム→図書館

BEFORE



4.スキルアップ法：温故知新

After

ベンダーA←図書館システム→図書館
ベンダーB←ディスカバリーサービス→図書館
ベンダーB←リンクリゾルバ→図書館
ベンダーC←機関リポジトリ→図書館
ベンダーD←デジタルアーカイブ→図書館
出版社B←研究支援ツール→教員（個人）
出版社B←本文誘導ツール（プラグイン）→個人

図書館で扱うシステム検索ツールの多様化、システムのトレンドも変化。
例：インストール型　→　クラウド型へ
　　リンクリゾルバ（有料）→プラグイン（無料）
　　機関（図書館）　→　個人（教員、学生）

システムやトレンドを理解するころに異動・・・継承されない専門性

4.スキルアップ法：温故知新

○「専門性」の変化

図書館システムをきわめる（深く）→

あまたあるサービスの中から最適な組み合わせを選択する（広く浅く）

○対応する力への変化

図書館と出版社の関係→大学として総合的な対応へ（学外（出版社）との交渉力に加え各部署との調整能力が必要なスキルに）

4.スキルアップ法：温故知新

図書館のサービス普及パターンから考える

〇キャッチアップ型のサービス

（海外の先進事例を導入するという意味）

電子リソース、研究支援、アクティブラーニング

→海外の動向を意識したサービス展開が必要

〇再定義された新たなサービス

機関リポジトリと寄贈交換

ラーニングコモンズと施設整備

→理念と時代のニーズのすりあわせ

5.スキルアップ法：他業界との比較

分析方法はさまざま

SWOT分析　Strength：強み（プラス要因・内部環境）/Weakness：弱み（マイナス要因・内部環境）
Opportunity：機会（プラス要因・外部環境）/Threat：脅威（マイナス要因・外部環境）

PEST分析　Politics（政治的要因）　/　Economy（経済的要因）
Society（社会的要因）　/ Technology（技術的要因）

本講義では簡単な方法を使う

図書館業務を客観的に考えるために、隣接分野や類似のサービスと比較する

図書館業界を考えるために、出版業界が出版事業をどのように見ているか参考文献として次のテキストを使用する。
日本出版学会編『パブリッシング・スタディーズ』印刷学会出版部, 2022.4　書籍/雑誌/大学図書館の各章

参考資料２

5.スキルアップ法：他業界との比較

	プリント版	デジタル版
書籍	一定量の紙の本は流通	漫画から定着
	強　伝統的な蔵書コレクション	弱　漫画の受入
雑誌	紙の雑誌はニッチな分野で発行され続ける	和雑誌のデジタル販売の方法論が展開中である
	弱　ニッチな分野は研究費購入？ or セットで高額図書として購入する形に？	強　電子ジャーナルを受入れた経験が役立つ

参考資料２

5.スキルアップ法：他業界との比較

	内容
中抜き論	編集機能は残る。そうした役割に従事する者が「編集者」「校閲者」「出版社」と呼ばれ続けるかどうかはまた別問題だが
	強　図書館機能（購入・管理・保存）は学術情報流通の中に残る。それが「図書館」と呼ばれ続けるかどうかは別問題だが＝ほかの議論とつながる点
発見可能性	書店・新聞・雑誌の書評機能の低下と SNS、動画配信プラットフォームでの評価の拡散 メタ情報（書誌情報）の充実とSEO対策
	強　WEBを使ったレファレンスを展開してきた図書館にとっては、AIもあらたな情報源ができたと考えればよいのではないだろうか。

参考資料２

5.スキルアップ法：他業界との比較

<u>小まとめ</u>

・業界比較から見えたこと

図書館は日本の電子雑誌・書籍のビジネスモデルやツール（AI、SNS）とどのような関係を結べるのかを模索する段階にきている

・想定されるスキルアップ法

1.日本の新しい電子書籍・雑誌サービスの導入にあたっては引き続き管理系のスキル（具体例：学術系電子リソースの契約経験や各種メタデータ運用経験）が役立つ

2.これからも図書館機能は必要とされる。どのように再定義するのか？

時代ともに変化する中抜き論：古くはGoogle、今はAI

私にとっては、国会デジタルコレクション（全文検索）

6.まとめ

スキルアップの奥義は
人によって違うので
あえて「白紙」にしました。

・とにかく目の前のお仕事をがんばろう
・視野と人の縁を広げていこう

2024 年度短期研修「大学図書館職員のスキルアップ法」参考資料

作成者：中村健（大阪公立大学）

参考資料 1)　　1.スキルアップ法：短期研修振り返り

1.WEB 情報
・Current Awareness Portal（国立国会図書館）https://current.ndl.go.jp/ ☞図書館業界動向
・STIUPDATE（科学技術振興機構）https://jipsti.jst.go.jp/index.html ☞学術業界動向

2.論文
・高野真理子「目録技術に未来はあるか」『情報の科学と技術 』67(8)、2017
・竹内 比呂也、國本 千裕「大学図書館機能の変化に対応する新しい大学図書館員の育成に関する考察」『大学図書館研究』114.2020 J-STAGE 搭載
・中村健「大学図書館における電子ジャーナル購入の歴史―公立大学図書館コンソーシアムが果たした役割とその特徴」（日本出版学会 2017 年秋季研究発表会） ☞公立大学の方にぜひ知ってほしい歴史
https://www.shuppan.jp/reports/shukikenkyu/2018/08/15/1134/
・「これが私の仕事です」『別冊 受験ジャーナル 国立大学法人等職員採用試験攻略ブック』☞大学図書館員の紹介があるが、どんな仕事をしているか参考になる。

3.書籍
・井上真琴『図書館に訊け！』（ちくま新書 486）筑摩書房、2004
☞世の中に図書館のレファレンスサービスの価値・意義を印象付けた本。
・福井京子『いま求められる図書館員 ： 京都大学教育学部図書室の 35 年』岩田書院、2012
☞本書で語られる図書館員としての姿勢はいつまでも参考になる。
・飯野勝則『図書館を変える! ： ウェブスケールディスカバリー入門』ネットアドバンス、2016
☞大学図書館員が示す新たなスキル。
・有田正規『学術情報の来た道』（岩波科学ライブラリー307）、岩波書店、2021
・リック・アンダーソン著、宮入暢子訳『学術コミュニケーション入門 ： 知っているようで知らない 128 の疑問』アドスリー、 丸善出版 （発売）、2022
☞上記2冊で、学術情報流通の歴史と現在を理解できる。
・立田慶裕『世界の大学図書館 ： 知の宝庫を訪ねて』明石書店、2024
☞世界の潮流を知ることは大切。

・JLA（日本図書館協会）図書館実践シリーズ ☞業務テーマごとにまとめられてスキルアップに便利。
https://www.jla.or.jp/committees/syupan/tabid/564/Default.aspx
・図書館情報学のテキスト（2010 年以降新刊が発行されている）：『現代図書館情報学シリーズ』樹村房、『講座・図書館情報学シリーズ』ミネルヴァ書房、『シリーズ図書館情報学』東京大学出版会など。

4.雑誌（オンライン） ☞アラート設定をして情報を得よう。
・大学図書館研究（E） J-STAGE 搭載 ☞ 各大学の事例が参考になる。
・情報の科学と技術（E/P）J-STAGE 搭載 ☞ 特集は業界動向を知るのに便利
・図書館雑誌（P） ☞公共図書館も含めた図書館業界情報掲載。動向を把握するには必要な雑誌。

5.年鑑・統計類 ☞企画立案に必要な数字やデータ、情報を得るのに使う。
・図書館年鑑（日本図書館協会）
・学術情報基盤実態調査 データは e-stat に搭載
https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/jouhoukiban/1266792.htm

6.試験
・検索検定：検索技術者検定（情報科学技術協会） https://www.infosta.or.jp/examination/

7.研修/講習会（最近はオンライン参加が可能なものが増えている）
【総合研修】
・短期研修
・長期研修（2 週間）
・大学図書館員のための IT 総合研修　https://contents.nii.ac.jp/hrd/it
・国立情報学研究所実務研修　https://contents.nii.ac.jp/hrd/jitsumu
【電子リソース・オープンアクセス】
・JUSTICE（大学図書館コンソーシアム連合）電子資料契約実務研修会：7 月開催（会員館限定）
https://contents.nii.ac.jp/justice
・JPCOAR（オープンアクセスリポジトリ推進協会）の各種研修会
JPCOAR の研修資料アーカイブ　https://jpcoar.repo.nii.ac.jp/training
【目録】
・NACSIS-CAT/ILL セルフラーニング（SL）教材　https://contents.nii.ac.jp/hrd/product/cat/slcat
・目録システム書誌作成研修　https://contents.nii.ac.jp/hrd/cat_biblio　（※2024 年度は開催休止、2025 年度開催予定）
【著作権】
・図書館等職員著作権実務講習会（文化庁）
【レファレンス】
・国立国会図書館の各種研修
レファレンスサービス研修「法令・議会・官庁資料の調べ方」「経済社会情報の調べ方」／
アジア情報研修　など
【古典籍】
・日本古典籍講習会（国文学研究資料館・国立国会図書館）
・西洋社会科学古典資料講習会（一橋大学社会科学古典資料センター）

8.イベント/学会/研究会
・図書館総合展（秋に開催）　https://www.libraryfair.jp/　☞最新動向～専門的な集まりまで
・NII 学術情報基盤オープンフォーラム（5 月～6 月開催）　https://www.nii.ac.jp/openforum/2024/　☞管理・システムに関わる話題が中心

----------＜個人申し込み＞----------
・大学図書館研究会　https://www.daitoken.com/　夏の全国大会、地域グループ
・日本図書館研究会　https://www.nal-lib.jp/　雑誌『図書館界』、専門部会（例：情報組織化 GP）
・日本図書館情報学会　https://jslis.jp/　☞学術研究

9.委員会スタッフ
・JPCOAR（オープンアクセスリポジトリ推進協会）や JUSTICE（大学図書館コンソーシアム連合）は委員として運営活動に関わることができる。
・設置母体（国立・私立・公立）、地域別の集まりの委員会の委員

参考資料 2)　　5.スキルアップ法：他業界との比較：テキスト資料：

日本出版学会編『パブリッシング・スタディーズ』印刷学会出版部, 2022.4
書籍/雑誌/図書館の各章より関連個所を抜粋

【書籍】
P114
4.3.2　書籍デジタル化の現状
　(1)「書籍」市場の推移
　「文字もの書籍」の販売額は、1996 年から一貫して下がり続けているものの、(雑誌扱い+書籍扱い)コミックスはさほど減っておらず、2019 年には反転上昇を見せている。また、電子書籍・電子コミックが年々拡大しており、特に電子コミックの急速な伸びにより、「書籍」全体の市場は、1997 年に匹敵するレベルにまで回復した。文字もの電子書籍と電子コミックを合わせたものを「総合電子書籍」と捉え、その販売額が「書籍」全体に占める割合(仮に「電子化率」を名付けてみる)を計算してみると、図 4.3 のように 2020 の実績は 3 割を超える。「総合電子書籍」の内訳を見ると、その多くの部分をコミックスが占め。しかもその割合は年々増加している。

P117
4.3.3　書籍のデジタル化の未来
(1)デジタル化、4 つの「ビッグ・テーマ」
1.中抜き(ディスインターミディエイション)
2.グローバル化(グローバリゼーション)
3.メディア融合(コンバージェンス)
4.発見可能性(ディスカバラビリティ)
(2)「中抜き」は進むか？←見通しが大きく違った点
　電子出版においては、紙の出版において必要だった多くの資材や設備、人員が、不要となり、省略されることで、著者と読者をつなぐ出版のサプライチェーン(あるいはバリューチェーン)が劇的に短縮される、と言われた。
(中略)
　遠い将来に何がおきるか、それは誰にもわからない。しかし、目に見える範囲の将来について、書籍のエコシステムからミドルパーソンが追放されることはなさそうである。
ただし、そうした役割に従事する者が「編集者」「校閲者」「出版社」と呼ばれ続けるかどうかはまた別問題だが。
P122
(5)発見可能性(ディスカバラビリティ)
　これまで、本の紹介機能を果たしていた書店や新聞・雑誌の書評が機能低下をきたしている。
書籍のディスカバラビリティを向上させるにはどうしたらよいか？　2 つの方向性が考えられる。一つは、SNS や動画配信プラットフォームといった新興メディアを使った紹介・販促。
もう一つは、メタ情報(書誌情報)の充実と SEO(サーチエンジン最適化)であろう。
(中略)
　いずれにしろ、書籍のディスカバラビリティ向上については、簡単な解決策はいまのところ見つかっていない。関係者の地道な努力が必要だろう。
P123
(6)そして、「本」はどうなるのか？
　書籍のデジタル化は 1980 年代から始まる長い歴史を持っており、その過程で様々な紆余曲折、トライアル＆エラーを経験している。
(中略)
　社会や産業自体がどうなろうと、あるいはメディア産業がどうなろうと、これまで「本」が担ってきた機能・価値を失うことはできない。それは大げさにいえば、人類の文明自体の崩壊を意味する。
(中略)
　「本はどうなるか」ではなく「本をどうするのか」という問いが立てられなければならない。

【雑誌】
P151
5.3.2　現状と課題
(1)伸び悩む販売
　一方、デジタル雑誌化率は、ABC 参加誌でも 240 出版社を調べた 2020 年度の「電子書籍ビジネス動向調査」でも 8 割に達し、雑誌のデジタル化自体はほぼ準備が調ったといえる。
(2)ようやく始まった販路の整備
　印刷された出版物の流通を出版取次に任せてきた出版社にとっては、デジタル雑誌をどのように流通させるかは手探り状態だった。ようやく、デジタル雑誌取次のサービス、雑誌読み放題サブスクリプションなどの販売ルート、雑誌の配信や販売を自社管理するアプリが調ってきたところだ。

P155-156
5.3.3　雑誌の今後の展開
(2)グローバル化とこれからの雑誌
　このように、各出版社は多角的な収益源を開発しているが、一般的には西洋諸国でも日本でも出版の利益率は数パーセントにすぎない。グローバル化した文化資本主義のなかで、出版産業が単体で存在し続けるには厳しい数字だ。いっぽう、メディア・コングロマリットの利益率は 2 桁になることも多い。資本主義的な帰結として、エンターテインメント企業は頻繁な M&A で組織構成を変えつつコングロマリット化している。
（中略）
　文化のグローバル資本主義化とは対極の流れもある。雑誌は産業で同時に文化だ。マス文化のニッチを埋めるように、特定の分野のカルチャー誌はファッション誌が、2010 年代以降でも独立系の小出版社から印刷物として創刊されている。2020 年には、アメリカで 1980 年代以降はじめてビニールのレコードが CD の売上を上回った。楽曲の魅力と同時にレコード盤自体への愛着に支えられて、売り上げ額は少ないものの日本でもレコードが人気となっている。雑誌もおなじだ。限定された市場になりつつあるが、ニッチな印刷物の雑誌もまた読まれ続けるだろう。

【図書館】
P224
8.2.6　図書館はどこへ向かうのか
　とはいえ、紙に印刷された出版物があり続ける限り、図書館はそれらをベースとしたコレクションを構築し、すべての人々の読書を通して知る自由を保障し続ける責務がある。
　（中略）
　出版が紙か電子かの二者択一ではないのと同様に、図書館についても、リアルな図書館と電子図書館を対立軸で捉えてはならない。リアルな図書館と電子図書館が融合し、紙とデジタルの両方のコレクションを提供できるハイブリットな図書館が近い将来においては当たり前の姿になっていくのではないだろうか。

　執筆担当者
　図書　林智彦
　雑誌　清水一彦
　図書館　野口武梧